



Title	Eating disorders and social media use among college students in Japan and China: a brief cross-sectional survey
Author(s)	柏, 一靖
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103156
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 柏 一 靖 ）

論文題名

Eating disorders and social media use among college students in Japan and China: a brief cross-sectional survey
(日本と中国における摂食症傾向及びSNS使用強度との関連)

論文内容の要旨

【背景と目的】

近年、若年女性が、Social Networking Service (SNS) に投稿される非現実的なスタイルを持つ女性の画像を見ることにより、自分の身体的評価を低下させ、摂食症 (Eating Disorders, EDs) のリスクを高めることが指摘されている。SNSの使用は、自分の体型に不満を持つ、乱れた食行動やEDsのリスクとなることが示唆されている。

SNSがEDsのリスクファクターであることに関する研究は、ほとんど欧米の女性を対象としたものである。アジアの研究によれば、この関係は欧米の文化に特有なものではない。中国の人は、海外の情報を得られにくい環境にあるにも関わらず、中国の女子大学生を対象とした調査では、約77%が身体不満を持っており、そのうちに、約76%に乱れた食行動が認められた。現在、アジアにおけるEDsとSNSの関連性に関する研究はまだ少ない。

本研究では、アジアである日本と中国におけるEDs傾向はSNS使用強度とbody esteemとの関連を調査し、両国の違いを考察した。

【方法】

調査方法：日本と中国の18-22歳の健常の男女大学生を対象に、インターネット調査会社に頼んで600人を募集した。その中でから、BMI値が30以上の参加者を除外した結果、日本293名、中国271名を解析対象とした。

使用尺度：

- ・ Eating attitudes test-26 (EAT-26)
- ・ SNS intensity scale
- ・ Body esteem scale for adolescents and adults (BESAA)
- ・ Patient Health Questionnaire-9 (PHQ-9)
- ・ Generalized Anxiety Disorder-7 (GAD-7)

分析方法：全てのデータ分析はSPSS 26.0で行った。

- ・ 国籍と性別による4群をわけ、個人情報と全ての尺度のスコアをANOVAで分析した
- ・ SNS使用強度を独立変数、EAT-26を従属変数、BESAAを媒介変数とする媒介分析 (Process model 4)

本研究は千葉大学医学研究院倫理審査委員会の承認を得た (No. 9A00N05)。

【結果】

- ・ EAT-26のスコアでカットオフ20点以上の割合は、日本は14.7%、中国は17%であった。
- ・ 日本においては、ED傾向は、SNS使用強度との関連がなかったが、body esteemとは弱い負の相関があった。
- ・ 中国においては、SNS使用強度が高いほどED傾向も高くなるが、body esteemを媒介因子とした場合に、SNS使用強度がED傾向に及ぼす悪影響は抑制された。

【リミテーション】

中国特有のインターネット環境により、利用可能なSNSアプリや機能が異なる点があり、今後の調査では対象とするアプリの統一が求められる。

【意義】

本研究は、日本と中国の大学生を対象に、SNS使用強度・身体満足感・摂食症傾向の関連性を検討し、両国におけるリスクファクターの違いを明らかにした点に意義がある。今後は、より多様な社会的・心理的要因を含めて、国や文化の違いに着目しながら、摂食症のリスク構造をより深く解明していく必要がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (柏 一 靖)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	土屋 賢治
	副 査	教 授	荒木 友希子
	副 査	教 授	下野 九理子

論文審査の結果の要旨

本論文は、若年成人におけるSocial Networking Service (SNS) 使用強度がボディイメージを変化させ、さらに摂食症 (Eating Disorders : EDs) 発症に寄与するのではないか、というリサーチクエストionsのもとに行われた研究を刊行したものである。この疑問の背景には、SNSに投稿される非現実的なスタイルをもつ女性の画像の閲覧が身体的評価 (ボディイメージ) を低下させ、乱れた食行動やEDsのリスクとなるとの先行研究がある。

この疑問に答えるために、申請者は18～22歳の健康な大学生各300名を中国と日本でインターネットを介して募集し、さまざまな評価尺度への回答を通じて検討を行った。採用された評価尺度として、摂食態度尺度 (EAT-26)、身体満足度尺度 (Body Esteem Scale for adolescents and adults)、抑うつ評価尺度 (PHQ-9)、不安評価尺度 (GAD-7) があり、また、現在の身長と体重、SNS使用強度を数値として尋ねた。肥満傾向 (BMI30以上) が明らかな対象者を除外したのち、564名 (日本293名、中国271名) を解析の対象とした。研究は千葉大学医学研究院倫理審査委員会の承認を得て行われた (No. 9A00N05)。

解析の結果、以下の結果が得られた。①ED傾向 (拒食傾向) を示す者 (EAT-26スコア20点以上) の割合は、日本、中国とも既報よりも2～3倍高かった。②日本の大学生では、SNS使用強度とED傾向に関連がなく、ボディイメージの低さ (身体満足度の低さ) がED傾向に関連した。中国の大学生では、SNS使用強度とED傾向が関連した。一方、SNS使用強度はボディイメージ (身体満足度) を高め、高いボディイメージがED傾向を抑制するという媒介効果が認められた。

本論文はEDsのなりたちにボディイメージが重要な役割を果たすことを追認するばかりでなく、SNS使用強度という外的因子がボディイメージを変化させる役割がある可能性を示唆した。この役割は中国の大学生にのみ観察され、研究開始時の仮説とはことなる方向の働きであったことから、EDsのなりたちに関わる「ボディイメージ」「SNS使用強度」などの変数を、文化・社会的なコンテクストを通じて適切に調節する必要性を示唆するものである。

本論文は、日本と中国の大学生を対象に、SNS使用強度・ボディイメージ (身体満足感) との関連を考慮しながらEDsのなりたちを多面的に検討した点に意義がある。EDsの研究における文化・社会的なコンテクストの位置づけを明示したことも評価に値する。

論文審査担当者は、研究の方法、結果、抑うつと不安を加えた追加解析の目的・方法・結果、結果の解釈について詳細に質疑を行い、申請者は適切に回答した。この質疑を通じて、申請者は本論文で得られた結論が妥当であることを示すことに成功した。

以上より、本論文は博士 (小児発達学) の学位授与に値するものと判断する。